ことばめぐり：生き物を表わす言葉と日本語の起源をめぐって

中澤光平（B02班研究協力者：国立国語研究所）

2016年12月〜2018年3月に与那国町教育委員会の嘱託員として与那国方言辞典の編纂業務を行っていた（2019年3月に与那国町より「どぅなんむぬい辞典」として発行）中で、与那国固有の語や先島固有の語、琉球固有の語などをいくつか見つけた（一部、2019年2月23日にヤポネシアゲノム新学術領域言語班2018年度第二回研究集会で発表させていただいた）。このような語の分布は、日琉諸語の話し手がどのように移住していったかを考える上で重要と思われるが、それらの中には、アダン、ガジュマル、ヤラブ「照葉木」、サネン「月桃」、マコ「ヤシガニ」、トカラ「シュウダ」（単に「蛇」かも）、ワカギラ「キシノウエトカゲ」、エナウ「礁地」（サンゴ礁のある水深の浅い部分）など、（日本）本土には存在しない動植物や地形を表す語が多く見られる。これらの語が、指示対象が存在する琉球にのみ見られるのはきわめて自然である。由来については、琉球諸語に広く見られることから、１．琉球祖語の段階で造語された、２．琉球祖語の段階で他言語から借用された、３．琉球諸語が分布する地域の基層語から借用された、４．琉球諸語の一部で生じ伝播した、などが考えられる。いずれが妥当かは、音対応の規則性や他言語に類似の形式が見られるかなどから明らかになると思われる（サネン「月桃」は中国語の〈砂仁〉由来との説あり）。

ところが、これとは逆に、その地域には対象が存在しないにもかかわらず、言葉だけ存在する場合がある。例えば、琉球には野生の「狸」も「猿」もおらず、実際、琉球諸語にはタヌキという語はないが、サルという語は広く見られ（首里saaru、石垣sarĩ）、サールー「猿に似た者。口のとがった者」などという言葉もある。何故サルという語が琉球語に見られるのか。諸方言の音対応が規則的なので、日本語から琉球祖語の段階で借用されたという可能性もあるが、猿がいる本土（九州か？）に琉球祖語の話し手が住んでいて、後に（猿がいない）琉球諸島に南下していったため、サルという語だけが琉球諸語に残ったというシナリオを考えたい（タヌキは残念ながら琉球語から失われた）。

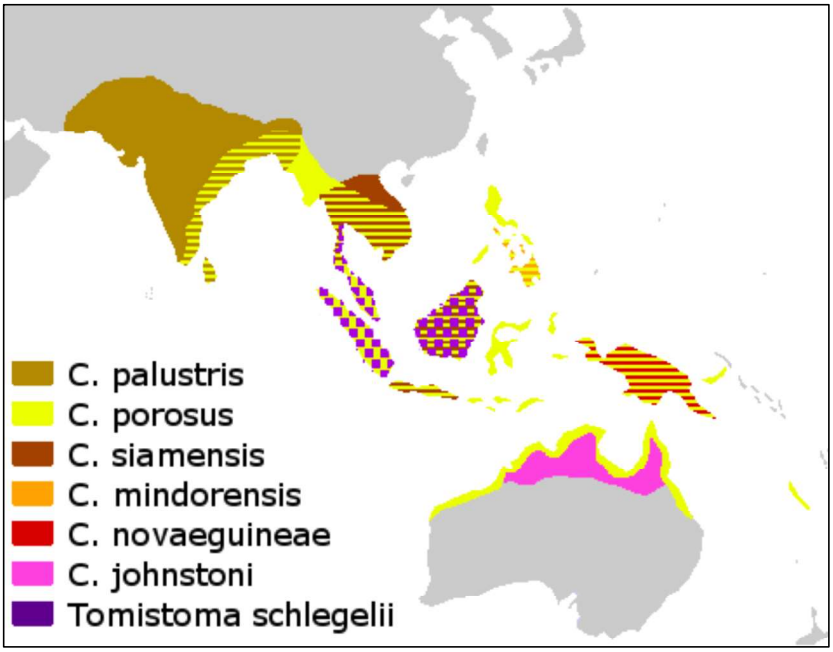
同様の問題が日本語にもある。日本にはワニ「鰐」もトラ「虎」もいないのに、何故これらの生き物を指す固有語（和語）が存在するのか。その地域に（元々は）いない動植物については、そのまま借用するか（ラクダ、コンニャク、タバコなど）、説明的に翻訳するか（シマウマ、カダヤシ、タマネギなど）が主流と思われ、「鰐」や「虎」は前者にあたるかもしれないが、ワニやトラという形式が他言語に見つかるだろうか。サソリ（元は「ジガバチ」）のように、別の生き物を指す語の意味が転じた可能性もあるが（サソリが〈刺す蟻〉に由来するなら本来は蜂の一種と見た方が自然だろう）、「猿」の例から考えると、元々日本語は「鰐」や「虎」が生息する地域で話されており、日本列島に移住した後もそれらの語が残ったという可能性もある。古語にはさらにキサ「象」やクサブ「針鼠」などもあり、日本語の話し手（の一部）は東南アジア辺りにいたのかもしれない。また、仮にこれらの語が他言語からの借用語だとしても、日本列島に移住してからではなく、日本語話者が大陸（近く）にいた頃に借用したと考えた方が自然ではないか。

ワニは〈和邇〉として「因幡の白兎」の物語にも出てくるが、これが「鰐」を指すのか別の生き物を指すのか（「ワニザメ」など）という論争が古くからある。非「鰐」説の最大の論拠は、日本に「鰐」がいないことと思われるが、インドネシアなど東南アジアに見られる類似の話でも、騙される動物は「鰐」であるというから、ワニの意味が「鰐」→「ワニザメ」→「鰐」のようにねじれたと考えるより、ワニは一貫して「鰐」であり、東南アジアからは話だけが伝わったのではなく話者ごと移動してきたのではないだろうか。ワニザメは「鰐のような鮫」の意で、方言で単にワニと言うのは、キンメダイ→キンメ、エノキタケ→エノキ、携帯電話→携帯のように、修飾語による換喩（メトニミー）で生じた新しい言い方だろう。ワニの意味として、私としては「鰐」説を支持したい（もちろん、「鰐」の知識が薄れる中で、「得体のしれない化け物」のように変化した可能性はある。〈和邇〉にはそのようなニュアンスがあるようだ）。

インド・ヨーロッパ祖語（印欧祖語）の故地を巡っても、「ブナ」や「鮭」など動植物の語と動植物の分布が論争になった。祖語にこれらの語が再建されるなら、印欧祖語は「ブナ」や「鮭」がいた地域で話されていたことになる

だろうが、実際はかなり怪しいようだ。また、動植物を表す語は意味（指示対象）が変化しやすいという性質がある。タヌキやムジナは地域によって「狸」を指したり「アナグマ」を指したりする（「たぬき・むじな事件」としても知られる。〈狸汁〉は「アナグマ」の肉を使い、本物の「狸」は美味しくないらしい）。「蝮」の方言にはハビ、ハメなどがあり、ハブとは語源が同じだが、「蝮」と「ハブ」は別種（別属）である。沖縄で建築用の高級木材で有名なチャーギ「イヌマキ」は、日本語のケヤキと対応する。どちらも木材として利用されるが、沖縄ではシロアリの被害がひどく、抗蟻性の強いイヌマキが重宝されたようだ。動植物の名前は生物学的にではなく、見た目や文化的基準（何に利用するかなど）にもとづくためだろう。このような点に注意しなければならないが、生き物を表す言葉は日本語の起源を探るうえで一つの材料になるだろう。

「虎」も「猿」も十二支の動物としてなじみが深いが、十二支の動物も、世界で若干異なる。例えば、亥が「豚」だったり、卯が「猫」だったり、丑が「水牛」だったりするようだ。地域によって動物が異なっているのに、日本で寅が「虎」なのは、やはり日本人に「虎」の知識があったからと思われる（意外にも、十二支はアジアのみならずヨーロッパにもあるようだ。他にも、「見ざる、聞かざる、言わざる」で有名な三猿も世界中にあるらしい）。琉球語に「猿」があるのには十二支の影響もあるだろう。与那国ゆかりの人物オニトラにもトラが含まれており、人名に使われるくらい一般的な語だったのだろう。では、オニトラのオニや、十二支のタツは何を指したのだろうか。トラが「虎」なら、オニやタツも、何か具体的な指示対象があったのだろうか？と、妄想が広がったところで話を終えたいと思う。



「鰐」の分布図（Wikipedia「ワニ」より加工）

ングヤ「ヤシガニ」（2017.6.7与那国町にて中澤撮影）